

障害者×スポーツ体験＝無限大 ～スポーツから広げる多様性文化の創造～

○井上 渉（就労移行支援事業所INCOP京都九条 代表）

1 概要

就労移行支援事業所INCOP京都九条（以下「INCOP」という。）は、京都駅から徒歩10分に位置している。「INCOP」は、私の京都市立支援学校での進路指導主事としての経験を活かし2023年2月に開所した事業所である。社訓に「やってみよう！」を掲げ、生の経験・体験の機会を重視した「超実践型トレーニング」を利用者に提供している。また、就労だけでなく、生活、余暇を含めた「WorkとLifeのINCOP」を目指し、日々サポートしている。知的障害や発達障害のある利用者が多く在籍している。その中で、株式会社島津製作所ラグビー部「SHIMADZU Breakers」（以下「Breakers」という。）との連携をはじめとした「スポーツを通じた就労支援」としてスポーツ体験にも力を入れている。今回はそのスポーツ活動の事例を通して活動の広がり、利用者の学びや成長について紹介したい。

2 事例

(1) チームとの連携

ア SHIMADZU Breakers（トップウエストAリーグ所属）

株式会社島津製作所とは、私が特別支援学校勤務時からつながりがあり、実習、雇用と連携していた。また、島津製作所が主催した障害者向けのテニス教室実施でも連携をしていた。

“Breakers”では、スタッフが少ないため控えの選手が試合会場の準備や試合中の水分補充をしていて、ウォーミングアップが十分できていない状態の中で、途中交代で試合に入るような状態があった。

“Breakers”のニーズ	“INCOP”のニーズ
・選手が試合に集中したい ・ホームゲームの運営を充実したい	・利用者の体験の場を増やしたい ・スポーツで見識を広げたい

“Breakers”と“INCOP”のニーズを組み合わせ、まずは、ホームゲームの準備、片付け、また試合中の選手の水分の補充といった試合中のサポートを“INCOP”とともにやってみようとしてスタートした。

2023年秋シーズンからの連携で、2シーズンを経過し、2025年11月は3シーズン目を迎える。役割は、試合会場の設営・撤収と試合中の選手の水分補充であった。はじめは“Breakers”の選手・コーチ陣は、障害理解が十分でないということもあり、「何ができるのか」「どこまで頼ん

でいいのか」と不安があったが、回数を重ねることで、他のスタッフ、選手から直接声をかけられる事が増えた。未知からくる不安は、関わりをもつことで既知になり、できること、難しいことも自然と洗練されていき、ちょっとした「こっち手伝って」を気兼ねなく声をかけてもらえることは、互いの信頼関係、“INCOP”の利用者への理解が高まったからであると感じている。さらに役割を果たすことで、信頼につながり、初めは依頼されていなかった受付での業務や試合写真の撮影、花道や円陣への参加といった役割の拡大にもつながっていった。

“INCOP”の利用者は“Breakers”のチームカラーにちなんで「レッズ」という愛称をもらって、チームの一員として位置付けられている（今年度から公式資料にも明記していただいている）。「レッズ」としてチームの一員としての位置づけが、利用者の帰属意識を高め、一種の誇りを感じている方もいて、そのことが一層の自己効力感を得ることにつながっている。

利用者のほとんどはラグビーのルールを知らない状態で活動をスタートしたので、はじめは、いつ点が入るのか、こういった状態なのかもあまりわからないまま活動していることも多かった。活動を重ねることで、試合の動きが分かるようになり、見通しを持って活動できるようになるだけでなく、ナイスプレーに歓声をあげられるようになり、水分補充を忘れて試合観戦に集中する利用者もいるほど、チームを「支える人」そして「応援する人」に「成長していく」様があった。

また、過去2回、京都で開催される田んぼラグビーにも“Breakers”と“INCOP”共同で出場した。その場でも選手、コーチと利用者が一緒にプレーし、泥にまみれて、関係も深める機会になった。

この活動を通して、「“INCOP”の利用者ならこんなこともできるのでは？」と島津製作所グループ内で障害者雇用の職域が広がり、実際に“INCOP”の利用者も就労している。“Breakers”の選手も職場の上司として在籍し、ラグビーを通して培った信頼関係が新しい職域、職場にもつながっている。



試合準備



活動の様子
受付準備



水分補充

イ 京都ハンナリーズ（B.LEAGUE所属プロバスケットボールチーム）

2024-2025年シーズンから京都ハンナリーズのホームゲームのボランティアとして活動をはじめた。こちらは“Breakers”と違って、他のボランティアの方々も活動しながら、一員として役割を担っている。役割は、会場準備片付け、会場の座席案内や再入場対応等である。

京都ハンナリーズでは、他のボランティアさんとの協働となり、一層の連携や報告連絡相談といった働くうえで必要なことが求められる機会が多い。さらに、プロスポーツということもあり、チームのファンと接する機会も多く、おもてなしをし、人と接する経験を積む機会になっている。

京都の色々な場面でハンナリーズの名を目にする機会がある。そういったチームに関われているという事実が「チームのチラシや広告を見ると誇らしいんです」という利用者の言葉に裏打ちされているように、自己効力感を高めることにつながっている。

さらには、「働きだしたら自分でチケットを買って応援に行きます！」と余暇の拡大、働くモチベーションにもつながっている。



ハンナリーズの活動の様子

(2) 各種スポーツ大会への参加

各種のスポーツ大会への参加も積極的に行っている。陸上大会やボッチャ、卓球、卓球バレーなどの競技に“INCOP”からチームや個人で出場している。これらの大会には、“INCOP”の在籍中の利用者だけでなく“INCOP”を利用し就労して働いている元利用者にも声をかけ参加している。

利用者が、いま、運動機会を確保する、ということはもちろんであるが、就労している元利用者が、一緒に参加することで以下の効果があるように感じている。

- ① 働きながら余暇が充実する場の提供
- ② 働きながら運動する姿のモデルを利用者が学ぶ機会
- ③ アフターケア

特にアフターケアについては定期的な訪問、聞き取りはおこなっているが、スポーツを一緒にやりながら、であればさらに何気ないことまで話しやすい雰囲気になったり、そもそも「われわれは皆さんを支えていますよ」ということが会うことでより伝わったり、何かあった時に頼ってもらいやすくなったりするのではと考えている。



陸上大会



ボッチャ大会



田んぼラグビー

(3) 地域スポーツ大会でのボランティア

2024年、2025年の京都マラソンのボランティアにも参加している。選手配布物の帳合やランナーの受付、当日は給水所の設営、運営等を担っている。地域での大きなイベントで役割を担って活躍し、ランナーにも「ありがとう」と言ってもらい、そのことが利用者の「地域の役に立っている」という自己効力感につながっている。

今後は滋賀県で行われる「わたSHIGA輝く 国スポ・障スポ2025」においてもボランティア活動をする予定である。



京都マラソンのボランティアの様子

3 取り組みを通して

障害者の地域社会参加という言葉は使い古されたほどよく使われるが、実際にまだまだ参加の社会へ広がる余地があるように感じている。今回、スポーツを通して「プレーする人」「支える人」「応援する人」が障害を越えて連携し、勝利を目指し、共有していく姿は、障害者の社会参加にとどまらない「多様性文化の創造」がそこにあった。多様な人が、1つの目的を共有し、それぞれの立場で役割を果たす、という文化がここにある。スポーツ体験には、この文化を色々な場所に広げて、大きくしていく力や可能性があることを実証している。我々はスポーツの持つ無限の可能性を信じ、様々な場所でスポーツを通した障害理解に努めている。

スポーツをともに働く力を高めるために重要な場と位置付け、効果的に活用している。さらに、「応援する人」としての可能性をもとに、利用者とスポーツを余暇としてつなぐ取り組みにも注力している。

今後もこれらの取り組みにより、スポーツを通した新たな多様な文化の無限の広がり貢献したい。

【連絡先】

井上 渉
就労移行支援事業所INCOP京都九条
e-mail : incop.inoue@gmail.com